

シンポジウム企画趣旨

コーディネーター 森 茂起

学術フロンティア事業では、事業の一つの柱として、五年間の研究期間に四回のシンポジウムを開催しようと考えた。現代の「心の危機」をめぐる諸問題を四つの切り口からシンポジウムに構成し、その企画を通して研究の活性化を図るとともに、学外に向けて研究成果を公開するのがその目的である。

シンポジウムの構成を決めるに当たっては、二つの原則を立てた。第一は、当然のことながら、現代の状況を反映し今後への展望を開きつる最前線のテーマであること、第二は、異なった分野の研究者の参加によって、一つの問題に立体的に光を当てることである。少なくとも、甲南大学大学院人間科学専攻の理念にそって、臨床心理学と現代思想の両領域にまたがる形でシンポジウムを構成したいと考えた。

第一回のシンポジウムのテーマに選んだのは、「トラウマ（心的外傷）」である。これが現代の「心の危機」をめぐる最も重要な問題の一つであることは誰もが認めるはずである。臨床心理学、精神医学の分野では、特に阪神・淡路大震災後にPTSD（心的外傷後ストレス障害）が注目されたのを一つの契機として、自然災害、事故、犯罪などが発生するたびに必ずPTSD対策に言及

されるようになった。また児童虐待の深刻な実態が明らかになり、その対策が積極的に進められるようになったのもこの数年のことである。家庭内暴力への注目も新しい傾向である。親にたいする子供の暴力はわが国特有の現象としてかねて指摘されてきたが、近年認識が高まってきたのは、夫の妻にたいする暴力である。西

欧型、思想

翻って、思想にとつてトラウマはどのような位置を占めるであろうか。まず、具体的問題として、深刻な心理的トラウマをもたらす事象のいくつかが、思想的に重要な意味を持つことは明らかである。たとえば、戦争に代表される暴力はつねに思想的にも深刻な問いを人間に突きつける。そのもつ



とも深刻な例であるホロコーストは、第二次大戦後五〇年以上を経た現在なお、というより近年になってますます切実な思想的問題として論じつつけられている。

しかし、具体的事象としてトラウマが思想にとって重要な問題領域に属していることは事実としても、たとえば哲学的にトラウマはとう理解されるのか、トラウマの心理学的理解と哲学的理解はどうかがいに関係するかなどと問ってみると、その答えを得るのは容易でない。心理学でいうトラウマが心的装置にたいする刺激が引き起こす心理的過程であるとすれば、トラウマという言葉が示す理解のあり方そのものがすでに心理学的である。それを哲学的に扱うとすればはたしてどのような視点があり得るのだろうか。

このシンポジウムでは、そこで、トラウマを語るために「記憶と証言」という視点を設定した。視点を絞ることによって議論をまとめるためであるとともに、記憶、証言という、心理学的定義と関連しながらもさらに包括的な概念を設定することで、視野を広げて心理学以外の領域から扱いやすくするためである。トラウマという現象は、「記憶」に発生するある特異な事態、固執と接近不可能性という一見相矛盾する特殊な事態でかなりの部分を代表させることができる。実践的課題としては、その記憶にいかに関接し、いかに「語る」か（あるいは語らないか）が、援助の方法論の核心を占める。そして、この記憶や証言の問題ならば、人文諸科学のなかで戦争や暴力をめぐる、あるいは歴史の問題としてすでに長く論じられてきた問題である。

シンポジウムの構成を決めるにあたって、「記憶と証言」を

鍵概念として検討した。当初の構想通り、臨床関係から二人、人文関係から一人と考え、前者には精神医学と臨床心理学から、震災以後トラウマの臨床に深く関わってこられた中井久夫先生、虐待を受けた子供の治療に長く携わってこられた西澤哲先生にお願いした。

中井先生は、J・ハーマン著『心的外傷と回復』（みすず書房）の翻訳、震災後の「心のケアセンター」での仕事など、近年トラウマの問題に深く関わっておられるが、さらに直接には、「記憶について」（『アリアドネからの糸』みすず書房）での記憶理論が興味深く、今回の主題を選ぶ一つの契機となった。

西澤先生は、虐待を受けた子供のプレイセラピーを実践してこられた方である。近年の児童虐待事例の増加は、現在の臨床心理学にとって最も重要な問題の一つであり、トラウマを論じるさいに欠かせない論点である。プレイセラピーのなかで子供の虐待の記憶に関わっておられる先生に、『トラウマの臨床心理学』（金剛出版）などに展開されているトラウマ論の観点から記憶について語っていただければと考えた。

思想関係からは、哲学の分野からレイナス研究を専門とする港道隆先生、芸術の分野から映画論を専門とする加藤幹郎先生にお願いした。レイナスは「傷」を思想の中核におく現在もっとも注目されている思想家の一人であり、哲学の立場からトラウマの問題に切り込んでいただきたいと考えた。港道先生には二一チエを扱った、『記憶然り、忘却然り』（現代思想）という論文もあり、今回のシンポジウムの問題群に関係する思想家としてもっともふさわしいと考えた。ただし、先生自身は心理学的なトラウ

マ概念と結びつけられるものかと危ぶんでおられたところを無理にお願ひして加わっていた。

加藤先生という映画の専門家にお願ひしたのは、筆者が著書に接して以前より興味を抱いていたこともあるが、映画というメディアがトラウマに関して特殊な性質を持つのではないかと思つたからである。つまり、映画という表現媒体がトラウマ的記憶を扱う仕方、トラウマとわれわれとの関わり方を映しているのではないかという感触である。シンポジウム開催に合わせて、午前の部で『質屋』（シドニー・ルメット監督、一九五七年）を上映したのは、フラッシュバックという映画技法が、外傷体験後の症状としてのフラッシュバックの再現という字義通りの意味で用いられた例だからである。「言語を絶する」トラウマ体験をこのように直接的に表現することは、他のメディアには困難である。その一方で、映画は私たちのトラウマ体験を隠蔽するメディアとしても強力な力を発揮する。それは「物語」というものが持つ、証言の二重性（表出と隠蔽）に関わっている。このあたりの議論を他領域とからめることができればと考えた。

シンポジウムのプログラム構成に当たっては、各シンポジストの講演を、通例よりやや長い三〇分とした。分野の異なる研究者で構成しているため、議論を深めるためには、それぞれの論者にある程度まとまつた論を展開していただく必要があると考えたためである。本紀要には、講演をもとに論文として書き直していたものや、本紀要に収録していない。独立した論文としても、それぞれ価値が高いと考える。

当日には、四人のシンポジストに加えて、横山博（甲南大学、

深層心理学）、吉岡洋（甲南大学、二〇〇〇年度より岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー、美学）の両先生に指定討論者の役をお願ひした。議論が幅広い領域に渡るだけに、橋渡しをし議論を深めるという指定討論者の役割も難しいと予想されるところ、是非にお願ひした。シンポジストの先生方も含め、ここであらためて御礼を申し上げたい。